

# 第2章

## 森林の履歴



原始・古代の人々は、森の資源をどのように利用し、暮らしの中に生かしていたのか。

遺跡の中から出土した資料をもとに、人々と森との関わりを見てみましょう。

# ふくしま森林文化企画展に 参加するにあたって

福島県文化財センター白河館（愛称 まほろん）

館長 藤本 強

まほろんは県南の白河市にあります。福島県が実施してきた埋蔵文化財の調査によって得られた資料を保管し、活用している施設です。その一環として資料の展示と体験学習を行っています。

日本列島は、現在でもそのほぼ3分の2が森林で覆われているという自然をもっています。これは過去にさかのぼっても森林がより広がったことはあっても、狭かったことはありません。このような自然に暮らしていた昔の人々は森林を毎日の生活の中に取り入れて暮らしてきました。縄文時代は森の恵みをたよりに暮らしていたということができましよう。水田稲作が導入された弥生時代以降でも、衣・食・住の多くの面で森林の中の資源を利用した生活が続いてきました。日本古来の文化は森林あつての文化です。そこで繰り広げられた暮らしをもう一度考え直すことも必要ではないかと考えています。

まほろん特別展示室での展示と古代のきこり体験などの体験学習やまほろん古代の森の散策を通して、これらを考え直すヒントを提示していきます。参加してみませんか。

## 1 森を拓く

### 旧石器時代の石斧

今から12,000年前以上の日本は、現在より寒冷的な気候のなかにあり、最終氷期と呼ばれていた。日本の最終氷期の中で一番寒かったのは、20,000年ほど前と推定されており、現在より6～8度程度平均気温が低かったと推定されている。海面が現在より約100m程低く、列島は一部大陸と繋がっていて、動物や人類の移動も想定されている。

寒冷的な気候の中、発見される石器類から、狩猟を基本生業とした小集団の人類の営みが考えられているが、今から25,000年前頃の日本の各地、200箇所以上で、礫を打ち欠いて作った、他の石器に比べてやや大型の石器の先端部を磨いて刃を付けた石斧が出現し普及する。

日本の最終氷期の中でも、23,000年ほど前に降り積もった始良 tn 火山灰 (AT) 直下は、関東地方では黒色帯が発達し、寒冷な中でも比較的温暖的な気候があったことが判っており、その時期に刃を磨いた石斧が普及していることは注目すべきことである。

人々は、今から25,000年ほど前の温暖化の中で広がった森林を拓き、その資源を道具や簡単な建築材などとして利用していたのであろう。

その後、鹿児島県の南部で起こった火山の大噴火により、寒冷の時期が再び訪れ、今から12,000年前に縄文時代を迎えるまで、石斧はほとんど姿を消し、温暖化とともに再び出現する。



図1 檜葉町大谷上ノ原遺跡の石器

左端が刃部を磨いた石斧。県内では同じ時期の刃部を磨いた石斧が南相馬市荻原遺跡、須賀川市乙字ヶ滝遺跡、会津若松市笹山原 NO 8 遺跡などで出土している。これらは、鹿児島県の始良カルデラを供給源とされる始良 tn 火山灰 (AT) の堆積以前の層から出土しており、関東地方では、関東ローム層といいつながら、黒色土壌の中から発見されることが多い。まほろんの敷地内で発見された一里段 A 遺跡もほぼ同時代と推定されている。



図2 会津若松市笹山原 NO 8 遺跡の石器

笹山原 NO 8 遺跡は、猪苗代湖の西側の丘陵上に位置する旧石器時代の遺跡である。周囲には、旧石器代の各段階の遺跡が分布しており、笹山原遺跡群と通称されている。写真の右下段 2 点が打ち欠いた礫の先端を磨いた石斧で、他は、狩猟具や加工具に使われたナイフ形石器などである。遺跡は、地質学的にも猪苗代湖の生成を考えると大変興味深い。

## 縄文時代・弥生時代の石斧

今から12,000～13,000年前程前から縄文時代が始まるが、旧石器時代に比べて比較的温暖な気候が続き、時代とともに人々は定住の生活を送る。

縄文時代には土器が出現するが、列島に土器が出現する段階に、旧石器時代の石斧に比べて大型で肉厚な長野県神子柴遺跡や青森県長者久保遺跡、福島市仙台内前遺跡に代表されるような伐採や加工用の大型の磨製石斧が各地に出現する。その大型の石斧がどのように変化していったかは不確かであるが、縄文時代には各種の磨製石斧が非常に発達している。

人々は、各種の石斧を用いて、居住地を切り拓いたり、村周辺の森の中から、丸木船、建築材、木製の道具に適した材料を切り出し、加工しているような道具を製作している。

旧石器時代においても、黒曜石の流通のように、地域間や集団間での資源などの流通圏が確立され、列島各地で情報の交換が行われていたが、縄文時代には、石器の材料となる石材の流通だけでなく、アスファルトや貝輪、翡翠製の五類をはじめ多くの資源の流通や広域な情報交換のネットワークが成立、発達していた。生活の中で利用する道具の全てが、村内でまかなっていたわけではなく、一部の物については、特定の地域で多量に製作され、それが広い地域に供給されていることが最近の発



図3 縄文時代の道具復元品

掘調査でわかっている。磨製石斧においては、縄文時代前期後半に蛇紋岩を用いた石斧が富山県で生産され、広い地域に流通していることが判っている。縄文時代中期後半から後期後半にかけては、新潟県の北半部の新発田市上車野E遺跡や奥三面に所在する村上市アジヤ平遺跡などで素材から完成品までの製作工程がわかる磨製石斧製品、未製品、砥石などが多量に出土しており、そこで完成した磨製石斧の多くが隣接県まで含めた周辺地域に供給されていたものと推定されている。

弥生時代には、大陸から新たな文化や技術が流入し、斧においても大型の蛤刃の石斧や加工用の鑿形の石斧が発達している。縄文時代以上に森の資源を利用して、木製の道具を作る技術も大きく進歩している。また弥生時代には、鉄製などの金属製品の出現という大きな変化があった。



図4 縄文時代の磨製石斧



図5 弥生時代の道具復元品

金属器は、弥生時代の比較的早い段階から認められる。弥生時代後期に木製品の加工方法が大きく変化しているのは、弥生時代後半の鉄製品の普及の顕れを背景としているとの見方がある。石斧は列島の北部を除いて弥生時代以降には見られなくなる。石に変わって鉄の道具が主体となったのであろう。鉄の道具の普及は、人々に森の資源の加工を容易にした。それと同時に、豊かな資源である森林の開発も人々に容易にした。縄文時代から弥生時代にかけての人々と森林との共生も、その後は一部で侵されることもしばしばあったことが指摘されている。

## 2 森から創る

森林の資源は、旧石器時代では不明であるが、縄文時代以降、各種の道具に多種多様に利用されている。

縄文時代や弥生時代の遺跡から出土する木製品を詳しく分析すると、道具によって樹木の種類が異なることが判る。この種類の木は斧の柄に、あの種類の木は建築材にと整理されているのである。これは縄文時代において、人々の中に樹木に対する知識が経験や交差する情報を基に共有化されていたことを表している。

樹木を加工して道具を作るだけでなく漆の樹液の利用も縄文時代前期以降盛んに行われている。木製の器に漆を塗った漆器の他にも、山形県押出



図6 古代の道具と木製品の復元品

遺跡（前期）や三島町荒屋敷遺跡出土品（晩期）のように、土器に漆を塗ったものもある。日本の漆木は中国からもたらされたものと推定されているが、列島の湿潤な気候の中で古くから活用され現在に至っている。

## 3 森の恵み

日本の森林は、大きく照葉樹林と落葉広葉樹林に分けられており、福島県の大方は落葉広葉樹林の中にある。春に森の息吹とともに木々が芽吹き、夏にはうっそうとした緑の世界が広がる。秋には葉が色づき、晩秋には葉が枯れておち、冬には殺伐とした光景が広がるのが、本県の森の姿である。

森林の中には多種多様の樹木があり、その木を利用して建築材や各種の道具が作られるほか、季節ごとに樹下には食用や薬用となる植物が生え、また森の中には多くの動物が生息している。

春のめづきとともに樹下にはワラビ、ゼンマイなどの山菜が生え、秋には多様なキノコが生息するが、縄文時代後期後半にキノコを形取った土製品が各地で認められるが、これは人々がキノコを食料として利用し、また毒キノコから派生する幻覚作用の神秘性を印象づけたものと考えられている。

秋の森林からは、クリ・クルミ・トチ・コナラなどの食料となるナッツ類が収穫される。多くの遺跡からは、食料としたこうした木の実が出土し



図7 押出遺跡出土彩漆土器

ており、喜多方市上林遺跡では、縄文中期の竪穴住居跡からクリが集中して出土し、三島町荒屋敷遺跡では晩期のトチが、また山形県押出遺跡では、縄文前期のクルミが多量に出土している。縄文時代の主食は木の実と考えられているが、秋の短い



図8 縄文時代のきのこ形土製品



図9 現生のトチ・クルミ

期間に大量に収穫し、処理、保管していたことが想定されている。

森の中には、食料となる植物の他に多くの動物が生息している。春に子孫を増やし、夏にはうっそうとした森林のなかで生息し、秋には冬に備えて活発に食料を求めて活動する。また渡り鳥が飛来するのも秋である。この時期が人々の狩猟の期間である。縄文時代、弥生時代を通じて、狩猟対象の中心はシカ、イノシシであった。遺跡から出土するものには、捕獲して食料とした動物の骨のほか、その骨を利用した道具や、動物儀礼に關与したと推定される動物形の土製品や獣面付き土器のように、土器の一部に動物の意匠を表現したのものもある。



図10 獣面付き土器（縄文前期）

協力者一覧 敬称略

個人 會田容弘 新井達哉 小沢弘道 齋藤義弘 佐藤鎮雄 田中耕作 田辺早苗  
野田豊文 森谷 幸

団体 福島県文化財センター白河館

山形県教育委員会 山形県立うきたむ考古資料館 村上市教育委員会 新発田市教育委員会

喜多方市教育委員会 福島市教育委員会 須賀川市教育委員会 郡山女子大学短期大学部考古学研究室